

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 6月 25日現在

機関番号：32309

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21592925

研究課題名（和文）家族と看護師の協働による認知症高齢者の周術期ケアの実践と評価

研究課題名（英文）Practice and Evaluation of Perioperative Care of Elderly People with Dementia by the Cooperation between Nurses and Families

研究代表者

伊藤 まゆみ (ITO MAYUMI)

群馬パース大学・保健科学部・教授

研究者番号：50251137

研究成果の概要（和文）：急性期病院外科病棟において、家族と看護師の、入院時からの認知症患者情報の共有と情報を活用した療養環境の調整、入院中の家族機能の活用、せん妄発症時の睡眠環境調整のための外泊の効果について検討した。その結果、外泊群は在院群の約半数の日数でせん妄症状が消失し、認知症高齢者の術後せん妄の改善に自宅外泊が有効であることが示唆された。また入院時の患者情報を家族と看護師が共有することにより、家族の不安軽減や患者への積極的な介入が生まれた。

次に、実践したケアプランの結果を分析・評価し、標準化を目的として、手術・外科的治療を目的とする認知症高齢者が多く入院する3つの病院の外科系・循環器系病棟で働く、中堅以上の看護師、病棟管理者を対象としたフォーカスグループインタビュー、個別インタビューを実施した。その結果、手術を受ける認知症高齢者の周術期ケアとして、①これまでの生活情報から導かれた認知症の行動・心理症状の把握と効果的な対応方法を含む術前ケア、②慣れ親しんだ環境づくりと、家族が提供するパーソナルケアによる患者の安心と安全を守る術後ケア、③家族の安心と患者の安心の相互作用を導く看護介入、の3つの骨子から構成された、手術を受ける認知症高齢者の周術期ケアの標準化プランを作成した。今後は本プランを活用した認知症高齢者に対する周術期ケアを実践し、さらに評価・修正を加える必要がある。

研究成果の概要（英文）：In acute care hospital surgical wards, we examined the following points: i) the sharing of the information of the dementia patients from the admission between the nurses and the families, and the adjustment of the medical treatment environment utilizing the information; ii) taking advantage of the family function during the hospitalization; iii) the effect of staying at home overnight for the arrangement of sleep environment at the time of the onset of delirium. As a result, the delirium symptoms of the "stay at home" group disappeared in about half of the number of days of stay compared with the "hospitalization" group. It was suggested that staying at home overnight is effective for improving the postoperative delirium of elderly people with dementia. Furthermore, by sharing the patients' information between the nurses and the families while practicing and evaluating the perioperative care of the elderly people with dementia

based on the cooperation of nurses and the families of the hospitalized patients, active intervention to the patients and anxiety reduction of the families were begun.

Next, we analyzed and evaluated the results of the care plan that was in practice. Then, for the purpose of standardization, we conducted interviews with mid-level or upper-level nurses and ward administrators working in the surgical/cardiovascular wards of the three hospitals where many elderly people with dementia were hospitalized for operative and surgical treatment. The interviews were conducted in both focused groups and with individuals. As a result, as the perioperative care of the elderly people with dementia who were undergoing surgeries, we created a standardized plan of perioperative care for them based on the following three points: ①Preoperative care, including how to respond effectively and understanding of behavioral and psychological symptoms of dementia derived from life information so far; ②Creating an environment in which the patients are familiar with and post-operative care for protecting the comfort and safety of the patients by personal care provided by their families; ③Nursing intervention which brings the interaction of comfort of the patients and their families. In the future, it is necessary to practice the perioperative care for the elderly people with dementia by taking advantage of this plan. Furthermore, it is also necessary to evaluate and modify the plan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：認知症高齢者、周術期看護、家族、術後せん妄、安全、実践評価

1. 研究開始当初の背景

認知症高齢者の周術期看護において、家族がそれまでの介護過程で得た生活情報や介護技術は、認知症高齢者のこころの安らぎをもたらす援助のために欠くことのできないものである。筆者はこれまで、急性期治療を受ける認知症高齢者の治療経過に伴う反応や、疼痛アセスメントと鎮痛剤使用実態に関

する研究、認知症高齢者の入院時情報の特徴に関する研究に取り組んできた。その中で、家族の付き添いにより認知症高齢者の術後せん妄症状が安定したという報告や、認知症高齢者の入院に際し、身体状況に関する情報に比べ、認知症に関する情報が少なく、その後のケアに活用されていないという実態を報告した。また看護管理上の工夫として多く

の看護師長が家族の付き添いを取り入れているという実態報告からも、介護家族のもつ生活情報や介護技術、家族の存在そのものをいかに活用するかが、認知症高齢者の周術期看護を成功させるためのキーポイントであると考えた。

これまで取り組んできた研究成果をさらに発展させ、認知症高齢者が安全・安楽に手術経過をたどり、術前レベルまで身体機能回復を果たすために、本研究では、急性期治療の場で家族の持つ認知症高齢者の生活情報や介護技術、家族の付き添いや面会が認知症高齢者にどのような効果をもたらすかの実態を明らかにした上で、家族のもつ力を活用し、家族と看護師が協働してケアプランを作成、実施し、その効果を探求することが重要な課題であると考えた。

2. 研究の目的

(1) 手術を受ける認知症高齢者の術前から退院までの期間で、家族が付き添っている時間と付き添っていない時間における、患者の発語、行動、反応、危険行動等を比較観察し、その違いの有無と内容を明らかにする。

(2) ①手術を受ける認知症高齢者の術前から術後の期間で、家族との協働の必要性がある内容、時期、所要時間を明らかにし、個別ケアプラン作成基準の基礎的情報を得ること、また、②家族との協働において重視すべき内容を明らかにする。

(3) 入院中の家族機能の活用、せん妄発症時の睡眠環境調整のための外泊の効果について検討する。

(4) 実践したケアプランの結果を分析・評価

し、手術を受ける認知症高齢者の周術期ケアの標準化プランを作成する。

3. 研究の方法

(1) ステップ 1

対象はA県内の3つの地域中核病院の整形外科病棟に勤務する看護管理者3名と、勤務帯のリーダー業務を担当する中堅看護師6名である。

方法は、入院時、術前、術直後、回復期、退院時における家族の付き添いの実際、患者ケアへの参加状況、家族付き添いの有無による患者の反応の違いを半構成的面接によりデータ収集した。面接データの逐語記録により、質的・帰納的に分析した。

(2) ステップ 2

①について、対象はA県内の地域中核病院であるB病院に入院し、大腿骨頸部骨折手術を受ける80歳以上の高齢者10名とした。このうち認知症あり群5名、認知症なし群5名に分け、術前から術後の8日間における看護必要量を、看護所要時間と看護記録字数量を測定し、両群を比較分析した。

②について、対象はA県内の地域中核病院であるC・D病院の整形外科に勤務する看護師各6名で、フォーカスグループインタビュー調査を行った。

(3) ステップ 3

対象はA県内の地域中核病院であるE病院に入院し、術後せん妄を発症した75歳以上の高齢者10名とした。このうち外泊群5名、在院群5名に分け、せん妄調査用紙を用いて、看護記録、診療記録から各勤務ごとのせん妄症状を得点化し、両群を比較分析した。

(4) ステップ 4

手術・外科的治療を目的とする認知症高齢者が多く入院する A 県内の地域中核病院である B・C・D 病院の外科系・循環器系病棟で働く、中堅以上の看護師、病棟管理者を対象としたフォーカスグループインタビュー、個別インタビューを実施した。ステップ 3 で実施した介入の結果評価と手術を受ける認知症高齢者の周術期ケアの標準化プラン作成のための重要要素について、自身の看護実践知と照らし合わせながら語ってもらった。

4. 研究成果

(1) ステップ 1 から

入院時における「対象理解・コミュニケーション」「環境適応」、術前における「対象理解・コミュニケーション」「治療遂行」、術直後における「治療遂行」「安全管理」、回復期における「治療遂行」「安全管理」「環境適応」、退院時における「退院調整」において、家族付き添いによる患者ケアへの意味づけ、効果の可能性が示唆された。しかし、家族付き添い終了後に、不穏行動、危険行動などの不安定な反応が患者に出現する事例がいずれの対象者からも報告された。

以上の結果から、手術を受ける認知症高齢者の看護において、家族のもつ機能を周術期ケアに活用する意義が明らかになったが、家族付き添い終了後の患者の反応を観察により明らかにすること、家族自身がとらえる付き添いの意味づけを明らかにしていくことが必要であると考えた。

(2) ステップ 2 から

認知症あり群の看護所要時間は 8 日間合計、1 日ごと、勤務時間帯ごとのいずれも認知症なし群に比べ長かった。ケアの内容では安

全・安楽に関する内容が特に長く、観察・処置、日常生活援助もなし群に比べ長かった。

家族との協働において重視すべき内容としては認知機能のアセスメント、身体・精神状態のアセスメント、認知症の行動心理症状 (BPSD) とその対応、夜間せん妄とその対応、危険行動と危険を予測した対応があがった。

以上の結果から、個別ケアプラン作成にあたって含まれる内容として、患者の認知機能と身体・精神機能のアセスメント、BPSD や夜間せん妄に伴う危険行動の予測と危険行動への対応が、家族との協働ケアに含まれる中心的な内容であり、期間は周術期を通じた期間、時間帯は日中および夜間であることが確認された。

(3) ステップ 3 から

せん妄発症から消失までの平均期間は在院群 5 名が 11 日、外泊群 5 名は 5.6 日で、外泊群が有意に短かった。外泊後すぐに改善された項目は睡眠で、外泊後の反応として患者、家族双方から「よく眠れた」との反応があった。睡眠と覚醒のリズムを整えることは手術をうける認知症高齢者のせん妄の発症予防、発症後の症状改善につながることを示唆された。

(4) ステップ 4 から

外泊群は在院群の約半数の日数でせん妄症状が消失し、認知症高齢者の術後せん妄の改善に自宅外泊が有効であることが示唆された。また入院時の患者情報を家族と看護師が共有することにより、家族の不安軽減や患者への積極的な介入が生まれた。

手術を受ける認知症高齢者の周術期ケアとして、①これまでの生活情報から導かれた認知症の行動・心理症状の把握と効果的な対応方法を含む術前ケア、②慣れ親しんだ環境

づくりと、家族が提供するパーソナルケアによる患者の安心と安全を守る術後ケア、③家族の安心と患者の安心の相互作用を導く看護介入、の3つの骨子から構成された、手術を受ける認知症高齢者の周術期ケアの標準化プランを作成した。

(5) 今後の課題

今後は本プランを活用した認知症高齢者に対する周術期ケアを実践し、さらに評価・修正を加える必要がある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

- ① Mayumi Ito, Hisako Kamata, Actual Nursing Practice by Proficient Nurses for Elderly Myocardial Infarction Patients and Problems with Self-Care, Kitakanto Med J, 査読有、61巻、2011、319-326

[学会発表] (計2件)

- ① 久保知恵子、伊藤まゆみ、急性期病院におけるせん妄患者への自宅外泊の取り組みの効果、第43回日本看護学会-老年看護、2012年09月27日、広島
- ② 足利章江、斉藤康行、伊藤まゆみ、手術を受ける高齢者の認知症の有無による看護必要量の比較、第42回日本看護学会-老年看護、2011年10月13日、神戸

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 まゆみ (ITO MAYUMI)
群馬パース大学・保健科学部・教授
研究者番号：50251137

(2) 研究分担者

兎澤 恵子 (TOZAWA KEIKO)
群馬パース大学・保健科学部・講師
研究者番号：50412995
平成21年4月～平成22年3月まで

大平 奈津美 (OHIRA NATUMI)
群馬パース大学・保健科学部・助教
研究者番号：10510042
平成21年4月～平成22年3月まで

(3) 連携研究者

大平 奈津美 (OHIRA NATUMI)
群馬パース大学・保健科学部・助教
研究者番号：10510042
平成22年4月～平成23年3月まで